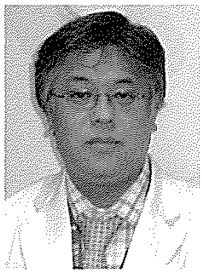
医療人

身近な文豪のうつ・自殺 精神科医の視点で分析

―昭和大・岩波准教授―



岩波明氏(昭和大学医学部精神医学教室准教授)は言論人でもある。『狂気という隣人』(新潮社)では精神科救急や触法精神障害者の実態を明かし，精神疾患が身近なものであること，健康と病気との境があいまいなことを提示した。『文豪はみんな，うつ』(幻冬舎)では，誰もが知っている作家やその作品を精神疾患との関連を踏まえて紹介した。

◇

『文豪はみんな，うつ』は「心を病んだ作家が書いた作品が国民的な作品として受け入れられているのは不思議だ」との思いから書き始めた。作家と精神疾患について，これまでも文学者あるいは医師の立場からのアプローチがあるが，今日的な視点も含めて独自に分析し，明治後期から昭和にかけての10人についてまとめ上げた。

例えば，夏目漱石の作品には精神病の症状が描かれることが多いが，漱石自身が明らかな精神病性うつ病で，幻聴，妄想やそれに基づく行動があった。島崎藤村の作品に登場する座敷牢は，統合失調症の父・正樹の様子がモデルになっている。藤村は統合失調症に罹患しなかったものの，うつ状態を経験している。躁うつ病の宮沢賢治は，うつ状態では創作活動が途絶え，躁状態の時に数多く脱稿した。

一方で岩波氏は，統合失調症とされている芥川龍之介は，抑うつ気分，意欲の低下，希死念慮，それに様々な身体症状から，うつ病だったとみる。人格障害とされる太宰治についても，恋愛，学業，創作，将来への悲観などのストレスに反応したうつ病を抱えていたとする。

◇

同書で取り上げた10人のうち，天寿を全うしたと言えるのは谷崎潤一郎だけ。他の作家は不遇の人生を歩んだり，心中や自殺で人生を終えたりしている。今で言うニートのような作家もいる。

書き終えて，「文学の難しさを感じた。幸福な人生を捨て，精神疾患にかかり，命を犠牲にしないと作れないもの。広く読まれているのは，そのことが読者の精神の脆弱な部分と共鳴しているからかもしれない」と岩波氏。

◇

ひるがえって，今の日本。毎日90人近くが自らの命を絶つ。うつ病への早期介入などによって自殺の予防を図る取り組みがなされている。

だが岩波氏は「医療だけで自殺予防に取り組もうとしても限界がある。社会構造，日本人の意識の変化が必要だ」と指摘する。それは，秩序優先の社会システムや敗者を切り捨てるシステムの変化だという。私たち自身のことである。